

## 書評

Sacha Loeve, Xavier Guchet, Bernadette Bensaud Vincent (eds.)

*French Philosophy of Technology: Classical Readings and Contemporary Approaches*

Cham: Springer、2018 年、409 頁

石長 佑一\*

### 1. はじめに

本書 *French Philosophy of Technology: Classical Readings and Contemporary Approaches* は、特に 20 世紀フランスの哲学史のうちに受け継がれてきた技術哲学に関する歴史的な系譜、そして技術哲学を形成してきた当時の時代背景や研究者間の交流など、技術哲学が隆盛していく状況が描かれている。加えて、近年の科学技術、テクノロジーと哲学の交錯、あるいは注目を集める美学やデザインに関する実践的な領域に関しても取り上げられており、「技術」を巡る包括的な論文集となっている。フランスの技術哲学は近年においてこそ重要度を高めているが、歴史的な蓄積にもかかわらず技術哲学の中心に位置してきたとはいいきれない状況にあった。そうした状況を踏まえ、本書はフランスの技術哲学に関する一般に向けた概説書となることを目的に書かれている。これまでに蓄積されてきた研究成果、あるいはその蓄積をもとにした実践的な分析など、多方向に展開しうるフランスの技術哲学が含む幅広い射程を示すものであるだろう。

### 2. 本書の構成

本書は 4 部構成の 23 の論文から構成されており、サシャ・ロエブ (Sacha Loeve)、グザビエ・ギュシェ (Xavier Guchet)、ベルナデッド・ベンソード・ヴァンサン (Bernadette Bensaud-Vincent) という、フランスにおいて技術哲学の展開の中心的な役割を担う 3 人が編者となりながら、合計 23 人の論者たちがそれぞれの独自のテーマを論じている。

---

\* 大阪大学大学院人間科学研究科共生の人間学 博士前期課程 1 年  
; u702735j@ecs.osaka-u.ac.jp

1部「文化的遺産との交渉 (Negotiating a Cultural Heritage)」では、近年までの哲学や科学における動向と技術哲学との間の関係について取り上げられている。まず、アンリ・ベルクソン (1859-1941)、ジョルジュ・カンギレム (1904-1995)、ジルベール・シモンドン (1924-1989) から、ジャック・エリュール (Jaques Ellul, 1912-1994)、フランソワ・ダゴニエ (François Dagognet, 1924-2015)、ベルナル・スティグレル (1952-2020) など、20世紀のフランスの哲学史を牽引してきた人物たちの紹介や現在までの動向を紹介している (1章、2章、3章)。その上で、宗教と技術の関わり (4章)、オーギュスト・コントの実証主義と対比させ、科学者らも巻き込みながら大きな論点となっていた戦後フランスにおけるサイバネティクスとその受容 (5章)、近年の思想を踏まえた自然と技術の関係性 (6章)、ゲーム研究 (7章) に関してそれぞれ論じている。

2部「テクノサイエンスの鑄造と再構成 (Coinig and Reconfiguring Technoscience)」では、わたしたちが科学技術やテクノロジーを考える際に重要な問題として浮上する倫理や政治、社会と関わる問題が主題となる。生命倫理を主題の一つに取り組んできたジルベール・オトワ (Gilbert Hottois, 1946-2019) による「テクノサイエンス (Technoscience)」に関する包括的な論考 (8章) や、ジャン・ピエール・デュピュイ (Jean-Pierre Dupuy, 1941-) はテクノサイエンスのうちに潜む形而上学的な問題を取り上げ (ここではサイバネティクスに含まれる科学と人間に関する検討)、フランソワ・リオタール (1924-1998) と科学に関する論じたもの (10章)、テクノサイエンスを認識論、存在論、政治・倫理的な観点から考察したものがある (11章)。2部では、客観性を追求する科学技術の進展のうちに、少なからず入り込んでしまう人為性あるいはそこに含まれる哲学や倫理に関する論点を取り出すことで、わたしたちの科学に対する認識を捉えなおす契機が提示されている。

3部「人類学的なカテゴリーを再訪する (Revisiting Anthropological Categories)」では、自然との関わり合いという視点から「技術」に関する問題が取り上げられる。主に技術的、人工的なものと自然的なものとの関わり合いを主題としながら、技術と自然が容易には分離できない側面を含んでいるということ、人新世、ナノテクノロジー、生命や身体などをテーマに論じている (12、14、15、16、17章)。また、20世紀フランスにおいて重要

な影響を及ぼしたアンドレ・ルロワーグーラン (André Leroi-Gourhan, 1911-1986) の分析を人間の認知機能に関する観点と結び付けて論じ (13章)、ベルナール・スティグレールは発展した産業社会における人間の意識や想像力の問題について取り上げている (18章)。

4部「倫理、デザイン、美学を刷新する (Innovating in Ethics, Design and Aesthetics)」では、技術倫理や産業社会におけるアート、ナノテクノロジーによるデザイン、メディアやデジタルデバイスと人間との関係を対象とした哲学的な分析が行われる (19、20、21、22、23章)。

### 3. フランスにおける技術哲学の体系的な整理とその特徴

サシャ・ロエブ、グザビエ・ギュシエ、ベルナデッド・ベンソード・ヴァンサン の3人によって書かれた初めの1章「フランスの技術哲学というものはあるのだろうか? : 一般的なイントロダクション」において、フランスの哲学史に潜んでいた技術哲学に関する動向の全体像が提示される。そして、近年の「技術」を主題とした新たな試みについても紹介されている。ここでは1章を概観することで、本書全体を貫いていると思われる前提を共有する<sup>(1)</sup>。

1章の冒頭にはダニエル・パロキア (Daniel Parrochia, 1951-) による「実際のところ、フランスの技術哲学というものはあるのだろうか?」という一節が紹介される。パロキアの一節が収められた論文ではフランスでの技術哲学を創始するための調査が行われ、デカルトから現在に至るまでの動向が概観された。パロキアの論文から10年ほど経過した現在では、フランスにおける技術哲学の進展は果たしてあったのだろうか。そして、もし現在において、技術哲学の進展があるとするならば、その内実はいったいどのようなものなのだろうか。この問題提起が1章を基本的に貫いており、技術哲学に対する本質的な問いかけを含んでいる。

ドイツ、オランダ、アメリカといった地域では、技術哲学に関する大学のポストや部局等の制度などが整備されつつあった。一方、フランスでは近年まで技術の哲学に関する特定の制度というものはない。近年になって、ジルベール・オトワとダニエル・セレーズエル (Daniel Cérézuelle) らの先導

により、1990年代には技術哲学に関する協会が設立され、リヨン大学とコンピエーニュ大学に技術哲学に関するポストが創設されるなど、徐々に制度上の整備が行われているところである。

しかし、フランスにおいても同様に技術哲学が論じられるようになってきているが、それ以前のフランスにおいて「技術」に関する哲学的な考察が行われてこなかったわけではないことも同時に指摘される。フランスの哲学史のうちには、大きな主題として浮上することはなかったものの、様々な角度や層のうちに隠れた主題として「技術」に関する問題が含まれていたのであった。

フランスにおいて展開される技術哲学の特徴とは、20世紀の他国と比較すると、機能主義的な観点から距離を取りながら技術それ自体への理解を務めるものであったと指摘される (p.7)。つまり、技術が社会においてどのような役割を果たしているのかという観点と比較して、道具、機械、操作、身ぶりや身体など、技術と本質的に重要な関係をもつ概念や分析を精査する試みであった。

こうした20世紀フランスにおける技術哲学の試みを把握するために、3つの重要な特徴が提示される。それは①「人類学的な転回 (anthropological turn)」、②ベルクソンの影響、そして、③「オブジェクトへの転回 (objects turn)」である。

簡略にその内実を記すとすれば、①人類学的な分析の重視は、技術は人間に付帯する状況によって構成されるという確信、あるいは信念が多くフランスの学者らのうちに共有されており、古代や化石時代の人間に関する人類学的な研究の勃興とその受容に現れていた (p.9)。しかしこうした人類学的な分析は、技術の本質を把握する上で、人間や人類の本質を見出そうとする決定論的な理由を求めているのではない。技術そのものを厳密に精査するために、人間にとって技術とは何かという問いを追求するものであるだろう。

ベルクソンは「技術」を主題として論じてきた人物ではないが、生物学の観点や政治や社会の観点から人間の根本的な条件について取り組んだことで多様な論点をもたらした。ベルクソンの功績は、その後のフランス哲学史に大きな影響をもたらしたことが指摘される。それは、カンギレムの技術への生物学的な認識論、ジャック・ラフィット (Jacques Lafitte, 1884-1966) の

「機械」に関する分析、ルロワーグーランやシモンドン、そしてミシェル・セール（1930-2019）や13章を執筆するルナイ（Charles Lenay）など、技術哲学に多くの功績を残す人物たちにベルクソンの影響を見出せることが挙げられる。特に生物や生命に関する視点から「技術」について取り組むことが可能となったのはベルクソンの功績が重要であった。

最後の③「オブジェクトへの転回」とは、その名の通り「モノ」そのものへの分析へと分け入っていくその流れのことを指している。「事物への転回（thing turn）」<sup>(2)</sup>が注目される中、フランスにおいては「オブジェクトへの転回」へと向かっていったことを指摘する。具体的には「技術的対象（technical object）」の分析、あるいは個別の科学技術に関する「テクノサイエンス」に関する分析である。

フランスにおいて、このオブジェクトへの転回をもたらした重要な人物はシモンドンであることが指摘される。シモンドンの提起する「技術的対象」という概念は、このオブジェクトへの転回において決定的な影響をもたらしている。さらにその後、ダゴニエは主体性を探求するよりも、オブジェクトについて探求をすることのほうが人間の心の本性をより明らかにすると主張し、「技術的対象」という概念は其中で継承されていった（11頁）。このオブジェクトへの転回が分水嶺となっており、近年まで続くエピステモロジーの論者たちの系譜や、本書でも取り上げられているナノテクノロジーや遺伝子組み換え作物（GMO）、生体分子や合成分子へと注目する潮流が形成されている、ということが指摘される。

ここで取り上げた3つの特徴のほかにも、フランス内外において多様なアプローチが存在している。ジャック・デリダやフランソワ・リオターラに影響を受けた現象学を中心とする「技術」に関する取り組みや、ハイデガーの「集一立（Gestell）」、あるいはピーター・ポール・フェルベーク（Peter-Paul Verbeek, 1970-）を中心とするポスト現象学、「技術的環境（Technical milieu）」の概念を受け継ぐフランスのマルクス主義なども存在している。

1章の全体像を見通すことで、フランスに技術哲学は存在していたのかという問いかけに対する一定の応答の筋道は見えてくるだろう。「STS（科学技術社会論）」のように、科学技術と社会との相互的な作用や関係を捉える方法とは異なり、哲学、人類学、美学などを中心に「技術」そのものへの分析に分け入り、各分野が相互に影響を与えながら「技術」に対する問いに取り

組んできたといえるのではないだろうか。

ここまで1章の内容を全体的に紹介することで、本書の大まかな見立てというものを提示してきた。以下では、1章で取り上げた人類学的な展開としてシャルレ・ルナイによる13章「ルロワーゲーラン：技術的傾向と人間の認知」、そしてオブジェクトへの転回としてグザビエ・ギュシェによる15章「オブジェクト指向の技術哲学に向かって」を紹介する。いずれの論考も現在のフランスにおける技術哲学の広がりを示す一例となっている。

#### 4. 技術への人類学的なアプローチ

13章「ルロワーゲーラン：技術的傾向と人間の認知」では、20世紀のフランスに多大な影響を与えたルロワーゲーランについて論じている<sup>(3)</sup>。

ルロワーゲーランの分析は、様々な知見を相互に応用しながら綿密な分析を提示してきた。こうしたルロワーゲーランの領域横断的で広大な視野を含んだプロジェクトは、一体なにを提示しようとしてきたのだろうか。ルナイは、ルロワーゲーランの分析について「人間という現象」(p.210)を捉えようとする試みであると指摘する。

はるか以前の先史時代からわたしたちの生活する現代にいたるまでの総体的な時間の流れの中、あるいは人間と生態的な世界との連続性の中で、その中でもとりわけ「技術」という観点から人間という現象について捉えようとしていたと指摘される。こうしたルロワーゲーランの研究成果を、ルナイは「有機体とその環境のあいだの機能的なカップリングに関する研究」(p.210)であるとまとめている。

ルナイによる論文では、ルロワーゲーランの業績を、①技術的な「傾向」と「事実」、②人間の機能に着目した古生物学的な分析、③「ヒト化」の問い、④記憶の外化、⑤「人類」という問題とその解決、⑥意図と予測、⑦言語の発達、という7つの観点から分析している。

ここでその詳細を取り上げることはできないが、いずれにしても人間の形態や道具、記憶、言語の発生に関するルロワーゲーランの研究を整理しながら、「技術」が人間の生物的特徴を大きく規定しているということが述べられる。

## 5. 応用としての「オブジェクトの哲学」紹介

15章「オブジェクト指向の技術哲学に向かって」では、オブジェクト指向の哲学と生物学的な技術哲学との関連が明らかにされ、「人工物 (Artifact)」に関する技術哲学の展望が提示される。

まず技術的に作られた人工物そのものへの探求ということが、ここ20年のうちに進展してきていることが紹介される。人工物に含まれている物質性に関する分析、そしてその人工物自体に内在している規範性や価値性を把握する方法について注意が向けられてきたのである。こうした人工物に関心の光をあてる人工物の哲学には、おもに2つの方法があると紹介される。まずは、フェルベークらが展開するポスト現象学的な分析手法である。もう一つは、おもに2000年代初期に展開された「技術的な人工物の二重性 (the Dual Nature of Technical Artifacts)」という名称で知られているアプローチである (pp. 237-238)。

しかしギュシェによれば人工物の哲学にくくられるこの2つの動向にはいまだ不十分な点が含まれており、この論考ではフランスにおいて独自にオブジェクト指向の技術哲学を築いてきたとする人物たち (ベルクソン、カンギレム、シモンドンなど) を登場させる。特にシモンドンの哲学を参照しながらギュシェが取り出そうとするオブジェクト指向の哲学とは、オブジェクトに内在する本性あるいは自然を規定するものではなく、むしろオブジェクトが人間によって形作られていくその過程がどのようなものであるかという視点に力点を置く。ギュシェによれば、形成されていく過程にこそ、その製作者の意図を超えていくようなオブジェクトの自律性が見出されるという。

オブジェクトに注目するギュシェは、特にナノテクノロジーに関する分析へと入り込んでいく。わたしたちの目には直接見ることのできない世界へと視点を移し、分子の運動を自然な状態において記述する科学的な分析に対して、そこに人間による操作や装置の機能性が入り込んでしまう、その余地を探りだしていくのである。つまり、オブジェクトという一見対象としてただ存在するだけのものに対しても、その製作の過程を紐解いていくことで自然的なものとならざるものとの境界を問い直す試みであるといえる。

## 6. おわりに

最後に評者の関心を少し付け加えるとするならば、フランスの技術哲学をより掘り下げていくことにより、人間と機械とのその関係をより多角的に捉えることができるのではないだろうか。本書ではサイボーグに関する論考やサイバネティクスに関する論考など、人間と機械とを問い直すような論考も含まれていたが、加えて「機械」や「技術」といったものが人間の活動のなかでどのように位置づけられてきたのかを踏まえ、わたしたちと「機械」や「技術」といったものとの密接な関係についてより考えていく必要があるだろう。

本稿では本書の広大な射程をすべて紹介することはできなかった。本書の魅力は、独立した論考にありながらも、主題としては浮上してこなかった「技術」に対する分析を捕捉しながら、20世紀フランス哲学史の、あるいはそれ以前、そしてフランス以外の学術的動向も含むような、様々な可能性へと読者を開いている点にあるだろう。「技術」そのものへと分け入っていくフランスの技術哲学には多くの魅力的な要素が含まれている。

## 注

- (1) ( ) 内に頁数を表記している場合は、今回取り上げた本からの引用となっている。
- (2) 「事物への展開 (thing turn)」はポスト現象学の流れの中でフェルベークにより提示されたとされる。また artifacts と object との違いについては本書 (pp.238 - 240) を参照。
- (3) 13章において取り上げられたルロワーグーランの著作は、1965年までの著作が取り上げられている。そのため日本語に翻訳された『身ぶりと言葉』での内容は今回の13章の論稿からは対象外となっている。